総合教育センターだより

街路樹

発行第184号
令和６年８月２９日（木）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

8月

「英語・外国語の授業改善の視点と実践例紹介」

７月30日（火）の授業実践講座〈中学校：英語〉では、中学校英語科の教員として数多くの実践を進めてこられた楢葉町立楢葉中学校の松本涼一校長先生から「生徒も教師もわくわくする授業を目指して」という題目で講義・演習を行っていただきました。その中で紹介された生徒の英語力を高めるための帯活動（短時間継続的に行う活動）をご紹介します。

１　2 minutes chat（ペア活動）
　教師が示すトピックについて、ペアで２分間話す。（もし会話が続かない場合は日本語も可）
　例）What do you want to do during the summer vacation?

２　1 minute monologue（ペア活動）
　教師が示すトピックについて一人の生徒がメモを取るなどしながらトピックについて考えた後、１分間英語で話す。もう一人の生徒はペアが話した英語の発語数をワードカウンターを使って数えて、記録する。

３　じゃんけんディベート（ペア活動）
　教師が示すテーマについて、じゃんけん勝者が肯定側、敗者が否定側になり、ディベートをする。
　テーマの例）Summer vacation is not good.

４　Chain letters
　（３人組でワークシートを回覧しながら行う活動）
　⑴　教師が示す「お題」について賛成か反対かを理由も含めて自分の考えを英語で書く。
　　お題の例）We should have lessons on Saturdays.
　⑵　ワークシートを２人目に渡し、２人目は⑴の反対意見を書く。
　⑶　ワークシートを３人目に渡し、３人目は⑴と⑵の意見を読み、賛同する意見を支持する形で、３人目が意見を書く。

帯活動の効果は、生徒の英語への興味と学習への意欲を高め、学習におけるつまずきを取り除き、言語材料を定着させることなどが挙げられます。上記の活動を行う際にはALTとのデモンストレーションを取り入れるのも効果的です。生徒にとって楽しく、英語の表現力を高められる授業を進めていきましょう。

「支援員との連携を深めていくために」

本市の特別支援教育支援員（以下、支援員とする）は、障がいのある児童生徒に対し、食事、排泄、教室の移動補助等、学校における日常生活動作の介助や発達障がいのある児童生徒に対し、安全確保と学習活動上の支援を行うことを目的とし、現在約170名の支援員を配置しています。

□学校現場の現状と課題
　文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査（2022年）」において、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は全国の公立小中学校に通う児童生徒の8.8%にのぼり、10年前の調査から2.3%増と公表されました。
　学校現場では特別支援学級にとどまらず、通常の学級においても多様な特性をもった児童生徒への関わり方に苦慮している現状がみられます。

□支援員の役割、協力と連携
　支援員の専門性を高めるため、年に３回、支援員研修を実施しています。先月７月に行われた第２回支援員研修では文部科学省特別支援教育課より講師をお招きし、「支援員の役割」についての講義やパネルディスカッションを行いました。講義内容や支援員の意見・感想、学校の現状と課題等から「学校現場において、支援員は重要な役割を果たす存在である」と確認したところです。
　児童生徒を支援していく上では、校内での連携が重要になります。特に、特別支援教育コーディネーターや担任との連携（情報共有等）が大切になります。時には支援員が学級担任の気付きにくい細かな学習や生活の様子について知っていることも少なくありません。児童生徒の様子を共有する時間を見つけながら、また支援員日誌を活用しながら、担任等と情報共有を行っていくことで、児童生徒への適切な支援へつながっていきます。
　「身近な大人が自分の成長を信じ、味方になってくれること」この経験こそが、児童生徒が生きていく中で必要なことであり、児童生徒の成長の力になります。
　本市の児童生徒のために、寄り添いながらの「あたたかい支援」を、そして学校内で連携を図りながらの「チーム学校」の支援を進めていきましょう。

「学級経営講座より」

７月26日（金）、150名の受講者が教職員研修室に集い、学級経営講座が行われました。講師を務めてくださったのは、「褒め言葉のシャワー」「成長ノート」「白い黒板」等の実践で全国的にも有名な、教育実践家の菊池省三先生です。小学校教諭として菊池先生が行ってこられた数々の実践を交えながらご講義をいただき、受講者は、「褒めて伸ばす学級経営の在り方」について、一日じっくりと研修することができました。
　菊池先生は、学級を構成する児童生徒一人一人の違いを肯定的に認め、個性を尊重することを大切にしていらっしゃいました。講義の中でも用いられた、「ひとりひとりちがっていい」「一人が美しい」「独りぼっちをつくらない」等の言葉にも、そのことが現れています。児童生徒は、先生や友達に大切にされることで自分の居場所を見出し、自己有用感を高めます。そして、そういった学級で安心感と信頼関係を得た児童生徒が、周囲の友達を大切にするといった好循環を生むという理論から、多くのことを学ぶ受講者の姿がありました。
　軽妙でユーモア溢れる話し方に引き込まれ、講義・演習の5時間30分があっという間でした。
「行く言葉が美しければ、返る言葉も美しい。」「人間関係は鏡である。鏡は先に笑わない。」「授業中は絶対に叱らない。」・・・菊池先生から聞かれる数々の言葉には、どれも裏付けと説得力がありました。そして、それらのことを、徹底して、例外なく実践し続けることが基盤となり、菊池先生が築き上げられたような学級に結びつくことが分かりました。先生方におかれましても、本講座や上記より得た学びを基にした地道な取組みと、その継続について推奨いたします。

　いよいよ2学期が始まりましたが、まずは、児童生徒一人一人に目を向けることや、独りぼっちをつくらない学級づくりからスタートしてみましょう。